

国家安全保障とインテリジェンス ーウクライナ戦争の実例からー

北村滋

北村エコノミックセキュリティ

2023年1月

米国はロシアの侵攻作戦を前年の10月には把握

- ◎ ロシアがウクライナを侵略してから1年が経過。ウクライナの予想以上の「善戦」は、米国がインテリジェンス(情報)分野で支援している影響が大
- ◎ 2022年2月24日、ロシア地上軍はベラルーシと接する北部国境、東部国境、南部クリミア半島の3方面からウクライナに侵攻
- ◎ ウクライナ、米国及び北大西洋条約機構(NATO)諸国は、侵攻の4か月前から、ロシアによる全面侵略作戦を前提に準備を開始
- ◎ 2021年10月27日、マーク・ミリー統合参謀本部議長はバイデン大統領にロシアの意図を報告
 - ・ 北・東・南の多方面からウクライナに同時侵攻を計画
 - ・ 3、4日で首都キーウを陥落させゼレンスキー大統領を失脚、傀儡政権を樹立
 - ・ 西進してウクライナの大半を占領を企図

等と説明



バイデン大統領



マーク・ミリー統合参謀本部議長

ロシアのウクライナ侵攻と米国高官の動向



プーチン
大統領

2021年11月、電話会談を行い、既把握のロシア侵攻計画情報の最終に検証



ウィリアム・バーンズ
米中央情報局(CIA)長官

2022年1月、会談の際、ロシアの作戦詳細を伝達、インテリジェンス支援も約束



ゼレンスキー
大統領

ジェン・サキホワイトハウス報道官

2022年3月3日、開戦前からウクライナに対して支援をしてきたことを公表

- ここ数か月にわたり、ロシア軍の計画と活動について相当量のインテリジェンスを、詳細かつ迅速にウクライナ政府に提供してきた。
- 侵略への軍事的対抗に使用できる情報が含まれている。



ジェイク・サリバン国家安全保障担当大統領補佐官

2022年9月、メディアインタビューで支援を明言

ウクライナへ武器・装備供与を今後、倍化(redouble)する。

「非対称戦」において、最も主要な役割を果たすインテリジェンス

- ◎ 現代戦では、同等の戦力を有する正規軍同士が交戦することは希
- ◎ 兵力や火力で劣るウクライナ軍は米国のインテリジェンス支援でロシア軍の攻勢に抗拒
- ◎ 現代戦では、兵力等で劣る側は、相手が予想、対処しにくい別の手段で戦う「非対称戦」を敢行



破壊されたロシア軍戦車



ウクライナ側戦闘員

- ◎ 勝敗は、必ずしも兵員や武器の多寡のみに帰趨せず、勝利に決定的な役割を果たすのはインテリジェンスであり、「柔能く剛を制す」の精神にも通ず。
- ◎ 米国のインテリジェンス支援がプーチン大統領の野望を頓挫

※侵攻前のロシアの戦力はウクライナを圧倒

 ウクライナ		 ロシア
約26万人	現役兵力	約90万人
約90万人	予備役(動員可能)	約200万人
約59億ドル	軍事費	約617億ドル
約100機	軍用機	約1500機
約60機	ヘリコプター	約1000機
約2000両	戦車	約1万2400両
25(0)隻	艦船(内潜水艦)	約600(70)隻

出典: Global Fire Power

<https://www.globalfirepower.com/countries-comparison-detail.php?country1=ukraine&country2=russia>

- ◎ 引き続く戦闘によりロシア側に重甚な死傷者が発生
- 2022年11月9日記者会見



「ロシア軍の死傷者数は10万人を超えている」

マーク・ミリー米統合参謀本部議長

～ウクライナ軍による米国等から提供されたインテリジェンスの活用事例①～

◎ 侵攻直前の2022年1月中旬、ロシアのハッカーはウクライナ政府機関に「破壊的なサイバー攻撃」を実行

- これに対し、2021年末からウクライナに入国していた米国サイバーコマンド前線部隊や欧州連合(EU)サイバーセキュリティ即応部隊が基幹インフラ(社会基盤)のシステムを探索し、マルウェアを除去したことから損害最小限に抑制
- 同様な取組を米マイクロソフト社等民間企業も協力し、官民を挙げた周到な準備が奏功

◎ 開戦緒戦、ロシア軍はキーウ近郊のアントノフ国際空港の制圧に手間取り。米国の事前情報を活用したウクライナ軍の迎撃でロシア軍空挺部隊とヘリコプターが大打撃



アントノフ国際
空港の戦闘・破
壊された世界最
大の航空機

◎ ロシア軍機甲部隊の戦闘用、補給用の車両の多くが米国製の携行型対戦車ミサイル「ジャベリン」の餌食に。ウクライナ市民が携帯電話で撮影した写真やその位置情報を集積して作戦に活用。本携帯アプリの導入には、米国の財政支援と米国Tech企業からの多大な技術支援が存在



携行型対戦車
ミサイル「ジャ
ベリン」

◎ 2022年4月には、ロシア黒海艦隊の旗艦「モスクワ」が

- トルコ攻撃型ドローン「バイラクタルTB2」の陽動
- ウクライナ製の地対艦ミサイル「ネプチューン」による攻撃

によって撃沈。攻撃目標を設定するため米国がウクライナにインテリジェンス支援を実施した可能性



沈没しつつある
ロシア黒海艦隊
旗艦「モスクワ」

～ウクライナ軍による米国等から提供されたインテリジェンスの活用事例②～

◎ 2022年5月、ロシア軍将軍12人が殺害されたと報道

- 軍の指揮統制に商用通信サービスを使ったため所在位置が特定？
- 当初、ロシアは周波数ホッピング方式の軍用野外無線機を使用していたが、ウクライナ側の電波妨害で使用不能となった経緯

U.S. Intelligence Is Helping Ukraine Kill Russian Generals, Officials Say

Targeting assistance is part of a classified effort by the Biden

YAKOV REZANTSEV

Commander
49th combined army



OLEG MITYAEV

Commander
150th rifle division



ロシア軍将軍 殺害報道

ANDREY SUKHOVETSKY

Deputy Commander
41st combined army



◎ ウクライナに対し高機動ロケット砲システム「HIMARS」を、22年だけで20台供与。

- 本システムを活用し、前線後方のロシア軍弾薬庫を一掃
- ヘルソン奪還時にはロシア軍の兵站に必要な橋梁を破壊

◎ 2022年8月、米国防総省はロシアのレーダーシステムを狙う対レーダーミサイル(HARM)をウクライナに供与したことを明示

- 精密攻撃には、目標の緯度経度にとどまらず、高度、ベクトルを含む正確な3次元デジタル情報が不可欠、このような情報が提供されなければ、戦果は不可能。



高機動ロケット砲システム・HIMARS



対レーダーミサイル(HARM)

◎ 米国は、ウクライナの情報収集力を補うだけでなく、ロシアの「目」を塞いで攻撃力を低下させる支援を実施

ウクライナ戦争から得た我が国安全保障に関する教訓①

～迫りくる異形の大国・中国の軍事戦略～

- ◎ 中国は「A2AD」と呼ばれる軍事戦略を採用(A2＝Anti Access: 接近阻止・AD＝Area Denial: 領域拒否)の略
- ◎ 台湾や南シナ海などで有事が起きた際、グアムを通る「第2列島線」の内側で米軍の作戦行動を阻み、中国に近い「第1列島線」には進入させないという戦略
- ◎ 弾道ミサイルや航空機による攻撃で相手の空軍力や防空システムを無力化することで航空戦の優勢を確保し、兵員、武器、弾薬が集積した基地などを撃破するのが主な目的



「空母キラー」DF21



「グアムキラー」DF26

ウクライナ戦争から得た我が国安全保障に関する教訓②

～我が国の対応・新国家安全保障戦略等の推進～

- ◎ 有事では攻撃される前に兵員や武器、弾薬、燃料、指揮所などの兵力を適切に移動・分散して残存性を高めておくことが、死活的に重要
- ◎ 我が国は、正確なインテリジェンスに基き防空システムや航空機をあらかじめ機動的に移動・分散できる体制を整備することが急務
- ◎ 政府は、昨年末、新たな国家安全保障戦略など安全保障関連3文書を閣議決定
- ◎ 自衛のため敵のミサイル発射拠点などを破壊する反撃能力の保有を明記したことが注目
- ◎ 一方で、ウクライナでの戦争に見られる現代戦の特性を踏まえ、ターゲティング(目標設定)は言うに及ばず、戦略及び戦術の様々な局面で情報力と軍事力とを高度に融合した安全保障政策の推進が必要

